

## 読者を育み、社会を動かせ -- タイ・ミャンマーの書店活動記（フォトエッセイ）

著者	小林 磨理恵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	245
ページ	47-50
発行年	2016-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003017">http://hdl.handle.net/2344/00003017</a>



■フォトエッセイ■

# 読者を育み、社会を動かせ

## —タイ・ミャンマーの書店活動記—

写真・文 小林 磨理恵  
Marie Kobayashi

### ●本と人、人と社会をつなぐ書店

戒厳令下のタイで、ひとつの書店が店を閉じた。

タイでは二〇一四年五月に戒厳令が発令され、ほどなくしてクーデターが勃発、軍政権が誕生した。言論は厳しく統制される。民主主義に関する本の販売を自粛する書店もあると聞く。

店じまいした書店は、タイ北部のチェンマイにあった。社会科学分野の本を扱い、その多くが社会正義や民主主義に関するため、軍事政権後に経営の中断を余儀なくされたという。もともとの書店開業の動機は、大規模な抗議行動の末に多数の死傷者を出した二〇一〇年の事件の後、民主主義を抑圧する風潮が広まったことへの危機感。「本の販売は、市民社会の知的基盤を確保するため。書店のモットーは Café Democracy (Creating awareness for enhancing Democracy = 民主主義の強化につながる気づきを生み出す)」と経営者は語る。

「書店の場を、市民の対話を実現する公共空間にしたい」という強い思いから、本の著者を囲んでその内容を語り合う「ブックトーク」などのイベントを行ってきた。タイの政治史を専門とする村嶋英治早大教授を招き、氏の著作 *Kannet Phak Khommiunt Sayam* (シヤム共産党の起源) を語らうブックトークを開催したこともある。通常チェンマイに暮らす二〇〇三〇名の市民や知識人を集めるイベントだが、この回はかつての活動家も聴衆に顔を交え、約七〇名が集う盛り上がりを見せた。書店を閉じた後も、イベントは継続している。ただしテーマの選定に慎重を期し、





④内装も素敵なバンコクの Book Moby



②日本の旅行案内も多数 (Ran Lao)



タイの代表的な知識人、スラック・シワラックが創った Suksit Siam (バンコク)



⑤タイ語版『1984年』はベストセラー



③Ran Laoの「学術書」の棚

「やわらかい」テーマを選ばねばならない。インド映画 Lunch Box (邦題『めぐり逢わせのお弁当』) の上映とその内容を語らう「ムービートーク」を開催したように。

近い将来、書店も再開できるように準備を進めている。書店を基盤に人と社会をつなぐ希望は途絶えていない。

●小さな書店に光る個性

チェンマイにある小さな書店、ランラオ。入り口に色とりどりのポストカードと、村上春樹など人気作家の翻訳書をそろえ、目立つ平置きスペースには様々な国の旅行案内やカフェの本がきれいに並び(①②)。小説や生活、文化に関する本を得意とする書店かと思いきや、奥に進むと、政治、社会思想、歴史関連の学術書が一角を占める(③)。カウンター正面には、クーデター後の休刊から復活した批評誌 ASS (読む) の最新号。趣味の領域から社会科学の研究まで、狭いスペースに広い関心をひきつける奥行きに驚かされる。

バンコクにも、ブックモービーという小規模ながら良書をそろえる作家が創った書店がある(④)。CDや雑誌が並ぶ傍ら、文芸書や政治、社会思想関連の学術書を取り揃えるジョージ・オーウェルの『一九八四年』には「ベストセラー」の見出しがついた(⑤)。

店内の雰囲気は惹かれて何気なく立ち入ると、感性と学問が交差し、共存する空間が飛び込んでくる。タイの小さな書店に光るその不思議な個性に、言論の自由を志向する静かな声を感じた。





⑦歩道で仏画や地図を売る



⑥古本があふれるヤンゴンの歩道



Book Smith（チェンマイ）には芸術書も多い



パンソーダン通りの大型書店 INNWA Book Store

## ●路上に広がる本の海

タイの西隣、ミャンマー最大都市のヤンゴンに目を転じたい。食品や日用雑貨など様々な物売る市場が連なるヤンゴンの歩道。パンソーダン通りに歩を進めると、露天古本屋の数に圧倒される（⑥⑦）。新刊書を扱う書店を四〇五軒めぐってみつけれなかった本のリストを露天古本屋の店主にみせると、いくつかの本をみつけ出してくれた。高価で購入をためらうと、その本の価値をとうとうと語る。古本それぞれの価値を熟知しているのだ。

ミャンマーでは、二〇一一年三月に民政移管がなされ、翌二〇一二年に事前検閲制度を全廃して以降、出版状況が急速に改善し、出版点数も作家の数も急増しているという。人気を博するのは「ジャーネー」（ジャーナル）と呼ばれる主に週刊のタブロイド誌であり、三〇〇誌以上が刊行されている。安価でSIMカードを購入できるようになったのは二〇一四年以降のことで、携帯電話は普及し始めたばかり。オンラインでニュースを読む習慣がないことも、紙のジャーネーがいまだ重要な情報源の地位にある所以だと聞いた。

露天ジャーネー屋の店主に一番人気のジャーネーを問うと、Non Roseという耳慣れない雑誌名が返ってきた。念のため他のジャーネー屋に複数当たってみたが、やはり同じ答え。その最新号の誌面をよくみると、一巻四号とある。創刊して一カ月、わずか四号目にして人気一位に躍り出ることが、果たしてあるのだろうか。事情を聞けば、本誌は激しい政権批判を繰り返し、印刷機やコンピュータを没収されるなど、事実上の発禁処分再三





⑨大型ショッピングセンター内にある



⑧一番人気の Iron Rose ← Sun Rays (中央)



ミャンマー情報省管轄の  
Sarpay Beikman の書店

Sarpay Beikman 書店の 2 階にある  
公共図書館



追い込まれてきた。しかしその都度雑誌名を変更することでしぶとく出版を続け、Iron Rose は二〇一三年創刊の Sun Light から数えて五つ目の誌名。誌名変更の痕跡を残すため最も長く続いた誌名 Sun Rays を現在の誌名の下に（大きく）記載する（⑧）。編集者は入国不可能といい、言論統制が残る現状が垣間みえるが、それでも出版は続行し、人々もそれを買ひ求めている。ここに、出版業界の勢いの一端をみた。

### ● 拡大する書店事業

露天本屋が衰えをみせない一方で、大型書店も出現している。TABブックセンター（以下TAB）という名のその書店は、二〇一一年に開業して以降、着々と規模を拡大させてヤンゴン市内に七店舗を構える（⑨）。TABは、アマゾンしながらウェブサイトに分野別の本の情報を豊富に公開し、店内には検索データベースを配置するなど画期的な取り組みをみせる。開業前に隣国の書店をみて回った社長が、少ないスタッフで効率的に運営する紀伊國屋書店に感銘を受け、その手法を参考にしたという。経営者は、検閲があつて自由に本を出版できなかった時代と比べると、出版点数も売上げも格段に伸びたと喜ぶ。「もっともっと本を読む人を増やしたい」。本の海外発送も見据えて、ますますの事業拡大を目指している。

### （注）

本稿の内容は、二〇一五年二～三月、現地での資料収集の際に見聞きしたものです。閉店していたチェンマイの書店は、二〇一五年九月に営業再開しました。